

第二章 紫の上の物語 紫の上の死と葬儀

[第一段 紫の上の部屋に明石中宮の御座所を設ける]

*秋待ちつけて(7月に入り、秋がやっと来て)、*世の中すこし涼しくなりては(京都も少し涼しくなると)、御心地もいささかさはやぐやうなれど(紫の上の御気分もいくぶんは楽になるようでも)、なほともすれば(やはり日によっては)、*かことがまし(思わしくありません)。*「秋」はく四季の一。夏と冬の間の季節。太陽暦では九月から十一月まで。陰暦では七月から九月まで。また、二十四節気では立秋から立冬まで。天文学上では秋分から冬至まで。昼が短く、夜が長くなる。五穀や果実が実り、やがて木々は葉を落とし、草花は枯れ、冬へと向かう。[季]秋。和歌などで、「飽き」にかけて用いる。>と大辞林にある。今年の太陽暦で立秋は8月7日だった。確かに、と言いたい所だが、実感としては、不思議と、その日から一週間弱は幾分涼しい日になった。というのも、今年は残暑が厳しく、9月一杯が夏日で10月に入っても暑さが続いた。が、中旬以降は涼しくなり、今日が11月6日だが朝晩は肌寒く早くも冬の気配を感じるという秋の短さ、頼りなさだ。尤も、明日11月7日が立冬だから二十四節気は相変わらず説得力がある、ような気もする。が、それでも此処で、いくら旧暦とは言え、7月と書くのは実感と違いすぎる気もするが、時間経過を示すには、やはり7月と記して、その1~2ヶ月遅れの季節感を思う、という読み方をせざるを得ない。残暑は例年厳しいが、それでも今年特別で、参照から外す、という難しい作業を強いられる。*「世の中」は与謝野訳文に<京>とある。従う。*「かことがまし」は<言い訳がましい>ではなく<恨みがましい=思わしくない>。

さるは(そうは言っても)、*身にしむばかり思さるべき秋風ならねど(寒さが身に沁みて迫る死期に心細くなる一方という秋風ではないが)、露けき折がちにて過ぐしたまふ(上は時雨の雨模様涙勝ちの日々を過ごしなさいます)。*「身に沁む」は<寒さが身に沁める、身に沁みる>という意味で現代語でも使う実感を込めた言い方だ。が、秋が身に染む、という言い方には<末期を実感する>という語感がある。注にも<【身にしむばかり思さるべき秋風ならねど】—『源氏積』は「秋吹くはいかなる色の風なれば身にしむばかりあはれなるらむ」(詞花集秋、和泉式部)。『源注拾遺』は「吹きくれば身にもしみける秋風を色なきものと思ひけるかな」(古今六帖、秋の風)を指摘。>とある。

中宮は、参りたまひ*なむとするを(ひと夏を二条院でお過ごしなされたので、中宮はそろそろ御所にお帰りに成らなければならなくなるのを)、今しばしは*御覽ぜよとも(もう少し御顔を見せていて下さいと)、聞こえまほしう思せども(上は申し上げて中宮をお引止めしたくお思いになるが)、さかしきやうにもあり(出過ぎたようでもあり)、内裏の御使の隙なきもわづらはしければ(帝からお帰りを催促する使者の御差し向けが絶え間ないのも気が重いので)、さも聞こえたまはぬに(そうは申し上げなさらずに)、あなたにもえ渡りたまはねば(東の対に出向くのは上にはもう大層になっていらしたので)、宮ぞ渡りたまひける(中宮の方から上の西の対のお部屋にお出向かれなさいました)。*「なむとする」は中宮の意志を示しているのではないだろう。「中宮は」の「は」は、対象体の一定状態である事を示して、それを条件項とした説話展開を図る構文での係助詞語用だと見れば、この「なんとす」は<~ということになる運びに差し掛かっている←成り掛かっている→そろそろそう成る>という事情説明の言い方になっている、かと思う。*「御覽ぜよ」は「御覽ず」の命令形なので<見て下さい>という意味になる場合は有るかと思うが、此処での「見る」は<会う>だろうから、「御覽ぜよ」は<会って下さい>よりは<会っていて下さい=顔を見せていて下さい>くらいの言い方なのだろう。

かたはらいたけれど(中宮に御出座し願うなど畏れ多いことではあるが)、げに見たてまつらぬもかひなしとて(かと言ってお目に掛からないのも勿体無いと言って上は)、こなたに御しつらひをことにせさせたまふ(此方の母屋に中宮の御座所を特別に設けさせなさいます)。「かたはらいたけれどげに見たてまつらぬもかひなし」は上の発言文として括弧校訂しても良いのではないか。照れ隠しにハシャイだ物言いに見えて、文字通りの意味など殆んど成立しない内容と考えると、論理的な整合性を図ろうとすると、非常な難文だ。

こよなう痩せ細りたまへれど(上はすっかり痩せ細っていらっしやったが)、*「かくてこそ(今の方が)、あてになまめかしきことの限りなさもまさりてめでたかりけれ(上品で風情のある事の魅力も増して美しい)」*「かくてこそ」は注に<『集成』「かえってこのほうが」。『完訳』は「当時の美人はふっくらした感じ。その常識に反して、痩せても美しいと讃嘆」と注す。以下「めでたかりけれ」まで、明石中宮の感想。>とある。

と、来し方あまり匂ひ多く(と此れまであまりに生気に溢れ)、あざあざとおはせし盛りは(際立って目立っていらした充実した時は)、なかなかこの世の花の薫りにもよそへられたまひしを(むしろ簡単に目にする手近な花の香りにも例えられていらっしやったが)、限りもなくらうたげにをかしげなる御さまにて(今はこの上なく可憐で可愛らしい御姿で)、いとかりそめに世を思ひたまへるけしき(心からかりそめの人生と世の中を見据えていらっしやる姿勢が)、似るものなく心苦しく(例えようもなく惜しまれて)、*すずろにももの悲し(中宮には無性に物悲しく思われなさいます)。*「すずろにももの悲し」の言い切りは、中宮の視点のまま、その中宮が上をいと惜しく見つめている場面全体を引いて見せるような語り口だが、主体に寄り添わずに客観描写に努める主語明示文で述語の整合性を図れば、中宮への敬語は外せない。

[第二段 明石中宮に看取られ紫の上、死去す]

風すごく吹き出でたる夕暮に(風が凄く吹き出してきた夕暮れに)、前栽見たまふとて(前庭の植え込みを御覧になると言っ)、脇息に寄りゐたまへるを(上が脇息を頼りに身を起こしていらっしやるのを)、院渡りて見たてまつりたまひて(殿がお見えになって御覧になっては)、

「今日は、いとよく起きゐたまふめるは(今日は機嫌良く起きていらっしやるようですね)。この御前にては(中宮の御前ですと)、こよなく御心もはればれしげなめりかし(この上なく御心も晴れ晴れしくなるようですね)」

と聞こえたまふ(と申しなさいます)。かばかりの隙あるをも(こればかりの小康にも)、いとうれしと思ひきこえたまへる御けしきを見たまふも(とても喜ばしいと思っ下さっている殿の御様子を御覧になつても)、*心苦しく(上は横になるのを申し訳なく思いながらも)、「つひに、いかに思し騒がむ(死んだらどれほどお嘆きになる事か)」と思ふに、あはれなれば(と思えば、自分の先立つ不幸な身の上も定めある世の無常と見て、こうお詠みなさいます)、*「心苦しく」は是だけでは分かり難い、というか、分からないが、下文の殿の様子などから逆推して、此处で横になる、なろうとして、その際に歌を詠んだ、みたいなことらしい。下文にも補足する。

「おくと見る ほどぞはかなき ともすれば 風に乱るる 萩のうは露」(和歌 40-05)

「はかなさや 萩のうは露 風に散る」(意識 40-05)

*注に<紫の上の和歌。「置く」「起く」の掛詞。「露」「置く」縁語。わが身を露に喩えてはかない命を詠む。>とある。春のサクラに例えられた女が、自分を秋のハギに例えて詠む風情。いや、ハギの花ではなく、萩の葉上の水滴に見立てたのか。前栽の萩はどんな色で咲いていたのか。ただ、「おくと見る ほどぞはかなき ともすれば」に<起きていると見る間も短く次の瞬間には>と<置いていると思っで見ている間に>を掛けた詠み方には、言葉遊びの軽さが有って、深刻じゃないのが上らしいと言え上らしいし、逆に「あはれなれば」の語感が妙に難しい。

げにぞ(なるほどその通りに)、折れかへりとまるべうもあらぬ(風の凄さに枝が折れ返って葉の上露など留まるべくもない)、よそへられたる*折さへ忍びがたきを(前庭のハギの姿に寄り添えられた上の大儀そうな、その横になり直す折の様子さえ涙を抑えられないものを)、*見出だしたまひても(殿は上の表情に目を見張りなさって)、*「折さへ」は「げにぞ折れかへり」を受けての洒落語用ではあるのだろうが、「折れかへりとまるべうもあらぬ」は<上が起きていられなくなって横になり直す>ことを示してもして、だからこそ「げにぞ」の「ぞ」の強調があるのだろう。即ち、上文の「心苦しく」は、起きていられなくなって、ゆっくりとだろが、また横臥した、または、する、という状況説明だ。*「見出だす」は<中から外を見る>であれば、殿も前庭を見る、ということだが、いくら上の歌詠みが悠長だからと言って、「折さへ忍びがたきを」ということなのだから、起きていられなくなった上の変調に<殿は目を見開いて注視した>という緊迫感の方を取るべきかと思う。尤も、本当に急変なら歌詠みどころではないのだろうし、非常に紛らわしい語用だ。

「ややもせば消えをあらそふ露の世に、後れ先だつほど経ずもがな」(和歌 40-06)

「はかなさを 競いもせぬが 遅れまじ」(意識 40-06)

*注に<源氏の唱和歌。「おく」「ほど」「露」の語句を受けて、自分も一緒に死にたいという歌。『異本紫明抄』は「ややもせば消えぞしぬべきとにかくに思ひ乱るる刈萱の露」(出典未詳)。『河海抄』は「ややもせば風にしたがふ雨の音を絶えぬ心にかげずもあらなむ」(出典未詳)、「末の露本の雫や世の中の後れ先立つためしなるらむ」(古今六帖、雫)を指摘。>とある。「ともすれば」と「ややもせば」は同じように使える場合もあるが、当然に別の語だ。「ともすれば」は<場合によっては>という不測事態に備える視点に於いて、仮想上での<それが変化して>を意味する言い方。「ややもせば」は<物事の進捗具合に応じて>という予想範囲での見方で<それが変化して>を意味する。上は「ともすれば」に<殿の意に反して先立つ不幸の可能性>を示唆していて、殿は「ややもせば」に<上がそのように考えがちであることが察せられるだけに懸念している>と言っているのだから、明らかに贈答歌になっている。下の宮の歌が双方への唱和なのだろう。

とて(と返歌なさって)、御涙を払ひあへたまはず(御涙を拭うこともお出来なさいません)。

宮(二人の姫である明石中宮が)、

「秋風に しばしとまらぬ 露の世を 誰れか草葉の うへとのみ見む」(和歌 40-07)

「はかなさは ただ秋風の 戯れぞ その文字通り 墓は無し」(意識 40-07)

*注にく明石中宮の歌。紫の上の歌の「風」、源氏の歌の「露の世」の語句を受けて、わが身も同じことと、紫の上を慰める歌。『河海抄』は「暁の露は枕に置きにけるを草葉の上と何思ひけむ」（後拾遺集恋二、七〇一、馬内侍）を指摘。>とある。「草葉」が<墓場>をいう言い方になる故実が中国古典にでもあるのだろうか。でも、特に謂れないとしても、何となく分かるような気がする言い方にも見える。土葬した場所を、故人への敬意を持って、そのまま手付かずに祀っておけば、やがて其処は草場になる、みたいな絵面の印象だ。が、是は「草場」であって「草葉」ではないし、実際の所、共同墓地は草が生える間も無く埋葬が続いて、塔婆も誰か分からないようになるほど日が過ぎても、手付かずどころか、埋葬作業で足の踏み入れが頻繁で草も生えない、とかいうのが、拡大社会の実相だったりする。祭り上げられるのは一部の有力者だけだ。でも、その一部の有力者の墓は組織権威の象徴とされて手付かずにしっかりと保全される。そして、ひっそりとしたそのたたずまいに、やがて草木が生い茂り、その草葉の陰で先人が眠る、と歴史成果が演出される。尤も、「草葉の陰」は手付かずに放置された墓場を、手入れが行き届いていない、という意味で非難する言い方の語用が多い気がするが、此処で言う「草葉の上」は<埋葬事>を引いて見えて、敢えて感情移入を避けているかの節もある。

と聞こえ交はしたまふ御容貌ども（と唱和なさって和歌を詠み交わしなざる御家族の御顔ぶれは）、あらまほしく（お目出度く）、見るかひあるにつけても（寿命も延びる恵まれた光景で）、かくて千年を過ぐすわざもがな（このまま千年も変わらずにいたいものだ）と*思さるれど（と上には思われなさったが）、心にかなはぬことなれば（それは適わぬ事なれば）、*かけとめむ方なきぞ悲しかりける（願う未練の煩惱が情けない）。 *「思さるれど」の主語は、殿か上か双方か。この詠み交わしが、上の振り出しだったことと、下文が上の発言であることから、上の視点による文、と読んで置く。 *「掛け留む」は<引き留める>と大辞泉にあり、命を繋ぎとめる＝生き永らえる、を意味している。のだから、「心にかなはぬこと」と振っているのも、この「掛け留む」は<願掛けする神頼み>の方が表意かと思う。

「今は渡らせたまひね（もうお帰りくださいな）。乱り心地いと苦しくなりはべりぬ（気分がひどく悪くなりました）。いふかひなくなりけるほどと言ひながら（体調の所為で仕方のない事とは言いながら）、いとなめげにはべりや（寝ていたのでは失礼に過ぎますので）」

とて（と言って）、御几帳引き寄せて臥したまへるさまの（御几帳を引き寄せて横におなりになった上の様子が）、常よりもいと頼もしげなく見えたまへば（いつもよりもだいぶ頼り無さそうにお見えだったので）、

「いかに思さるるにか（どうなさいましたか）」

とて、宮は、御手をとらへたてまつりて（と言って中宮は上の御手を御取り申し上げて）、泣く泣く見たてまつりたまふに（泣く泣く上の様子を拝し申しなさると）、まことに消えゆく露の心地して（いかにも消え行く露のように思えて）、限りに見えたまへば（最期に見えなさるので）、御誦経の使ひども（延命の読経を頼む急使たちが）、数も知らず立ち騒ぎたり（数え切れないほど多く各寺々に走り出しました）。

*先ざきも（以前にも）、かくて生き出でたまふ折にならひたまひて（加持祈祷によって蘇生なされたことがあるのに倣いなさって）、御もののけと疑ひたまひて（今回の危篤も御物の怪の仕業と疑いなさって）、夜一夜さまざまの事をし尽くさせたまへど（殿は修験者たちに夜通しさまざま

な除霊をし尽くしさせなされたが)、かひもなく(その甲斐も無く)、*明け果つるほどに消え果てたまひぬ(夜の明けきる頃に露が消え去るようにお亡くなりになりました)。*「先ざきもかくて生き出でたまふ折」は注に<「若菜下」巻(第八章一段)に紫の上の蘇生が語られていた。>とある。四年前の四月の話だ。*「明け果つるほどに消え果てたまひぬ」は注に<紫の上の臨終のさま。露の消え果てるさまに擬えられる。>とある。

[第三段 源氏、紫の上の落飾のことを語る]

宮も、帰りたまはで(中宮も御所にお帰りにならずに)、かくて見たてまつりたまへるを(このように養母をお看取り申し上げなされた事を)、*限りなく思す(縁の深さの表れと印象深くお思いになります)。*「限りなく思す」は注に<臨終に立ち会えたことを前世からの因縁と感慨無量に思う。>とある。

誰れも誰れも(殿も中宮も)、ことわりの別れにて、たぐひあることとも思されず(定めある寿命としての人の死とは受け止めなされる事が出来ず)、めづらかにいみじく(特別な重大事として)、明けぐれの夢に惑ひたまふほど(明けぐれの夢に惑いなされるのは)、さらなりや(言うまでもない事です)。「誰れも誰れも」は現代語では<その場の誰もが>という多人数をいう言い方だが、此处では場や状況の混乱ぶりを示す<当事者が皆我を忘れて>という意味のようで、この場で敬語が使われるべき人は、やはり殿と中宮だ。また、現代語でもこの「誰も」の語用は実はある。

さかしき人おはせざりけり(冷静な人は居ませんでした)。さぶらふ女房なども(側仕えの女房たちも)、ある限り(居る者は全て)、さらにものおぼえたるなし(一人も後の手筈に気の回るものは居ません)。

院は、まして思し静めむ方なければ(殿は誰にもまして気が動転していたので)、大将の君近く参りたまへるを(大将君が近くへ参じなされたのを)、御几帳のもとに呼び寄せたてまつりたまひて(御几帳のもとに呼び寄せ申し上げなされて)、

「かく今は限りのさまなめるを(このようにもう此れまでの様なので)、*年ごろの本意ありて思ひつること(この数年来出家を望んでいた事を)、かかるきざみに(この際に)、その思ひ違へてやみなむがいとほしき(その思いを適えず仕舞いなのが惜しまれる)。*「年ごろの本意ありて思ひつること」は注に<主語は紫の上。敬語はつかない。たんたんとした述懐の表れ。>とある。「敬語はつかない」の指摘には注視させられる。本人に成り代わって、この場合は、死者に成り代わって、寄り添って、という事が、伝わる相手にしか言えない事、というのが人にはある。言霊、は客観表現では伝わらない。表現できない。それが人間関係であり、その人の其処に在る意味だ。この言霊を受け継ぐべき人がいない、その伝言が施されないことを、霊が癒されない、ように人は思う。いやしかし、そうは言っても、その伝言の确实性に保証はないし、その内容の錯誤も当然に疑わしく、そも、それらが全く期待できなくても、物質循環には何の支障もない、と慰めにもならない慰めを言いたくもなる。が、むしろ、思いが伝わる事で人は報われる、と思いたい気持ち、は私にも在るような気がする。多分それは、重要な、種の存続に及ぶほどの、物質利用の効率化作用に関わる脳内情報伝達物質反応の仕組みなのだろう。

御加持にさぶらふ大徳たち(御加持を上げていた高僧たちや)、読経の僧なども(読経僧たちも)、皆声やめて出でぬなるを(皆静まって帰ってしまったようだが)、さりとも(そうは言っても何人かは)、立ちとまりてもものすべきもあらむ(まだ留まって後片付けや挨拶に控えている者も残っているだろう)。

*この世にはむなしき心地するを(修行を積むのには間に合わないと思うが)、仏の御しるし(上の仏心の御標として)、今はかの冥き途の*とぶらひにだに頼み申すべきを(今となっては冥土の道案内にでも頼み申したく)、頭おろすべきよしものしたまへ(出家させるので、剃髪の準備を申し付けてください)。さるべき僧(高僧では)、誰れかとまりたる(誰が残っていますか) *「この世にはむなしき心地するを」はくもう手遅れかも知れないが>みたいな語感だが、言い換えるとなると妙に難しい。仏教がらみの言い方は平易ではない。 *「とぶらひ」は「訪ひ」でく上自身が具する六道への道案内>のことらしい。が、同時に「弔ひ」でく殿からする上への供養>も複意した言い方なのだろう。殿の観念が滲む。出家を許さなかったことへの後悔、みたいな。

などのたまふ御けしき(などと仰る御様子は)、心強く思しなすべかめれど(気丈になさっているようでも)、御顔の色もあらぬさまに(御顔の色もいつになく)、いみじく堪へかね(非常に悲しみに堪えかねて)、御涙のとまらぬを(御涙の止まらないのを)、ことわりに悲しく見たてまつりたまふ(大将は当然の事と痛ましく拝し申し上げなさいませう)。

「御もののけなどの(上に取り付いた物の怪などが)、これも(今度も)、人の御心乱らむとて(父上のお心を乱そうとして)、かくのみものははべめるを(こうなっているだけのことでしょうから)、*さもやおはしますらむ(このままお眠りになってはいらっしゃらないで、また蘇生なさることでしょう)。 *「さもや」は注に<「さ」は仮死状態をさす。>とだけある。反語表現なのだから<また蘇生するだろう>の文意となる、とまでは、無い。で、勝手に補語する。

さらば(そうであるならば)、とてもかくても(何れにしても)、御本意のことは(出家なさることは)、よろしきことにはべなり(良い事とごさいます)。一日一夜(いちにちいちや、一日でも一晩でも)忌むこととしるし*こそは(修行を積むことは)、むなしからずははべなれ(無駄では無いと申しますが、)。 *「こそは」の係り結びは、此处では逆接で下文に続く。即ち、「はべなれ」の已然形は<ど>の文意を示す。「こそは」の「は」はそういう強調意だろう。

まことにいふかひなくなり果て*させたまひて(もし上が本当にお亡くなりになられたとしたのなら)、*後の御髪ばかりをやつさせたまひても(出家をお許しなされて死後の御髪型だけを下ろさせなされても、善行を積むことには成らないので)、異なるかの世の御光ともならせたまはざらむものから(特にはあの世での御恩恵ともお成りにならないでしょうから)、目の前の悲しびのみまさるやうにて(その御剃髪姿に目の前の悲しみばかりが増すようになりますので)、*いかがはべるべからむ(どう取り計らえば良ろしいしょうか) *「させたまひて」の「て」は条件提示を示す接続助詞だが、上に「こそは」の文型で、この項は逆説提示の構文となることが既定されているので、一般条件ではなく、仮想現実、少なくとも反論提示の仮定文、という位置付けになっていて、仮定条件の<～であるなら>を意味する。 *「後の御髪ばかり(のちのみぐしばかり)」は平坦に<死後の御髪型>と言っているのではないような気はする。それだと冷淡な響きもあるし、いくらか不遜な物言いにも見える。恐らくは仏法上の死生観を前提にした「後」

の語用なのだろうと、敢えて無視しようとしたが、続きの文がモロ仏典がらみなので、最小限の補語は試みる。*「いかがはべるべからむ」は主人に対する疑問の差し挟みで、主人に再考を促して、直ちには承らない事を示す言い方だから、普通は断りの婉曲表現だ。大将は初めに殿に慰めの言葉を掛けたが、この四年間の上の衰弱過程を思えば、是を最期と見るのが冷静な判断であり、大将は最後には殿にその直視を迫った、ということなのだろう。

と申したまひて(と大将は殿にお応え申しなさって)、*御忌に籠もりさぶらふべき心ざしありてまかでぬ僧(殿の忌中の御籠りにお仕え申そうとの心構えで居残っている僧の中から)、その人かの人など召して(誰それを選んで)、*さるべきことども(葬儀の取り計らいは)、この君ぞ行なひたまふ(大将が執り行いなさったのです)。*「おんいみ」は注に<『集成』「死穢のため、三十日間、使者の近親が引き籠ること。僧もその間の仏事に従う」と注す。>とある。「死穢(しえ)」は<死の穢れのこと。古代・中世において死は恐怖の対象と見られ、死は伝染すると信じられた。死体、それと接する遺族は死穢に染まっていると考えられ、清められるべきものと考えられた。葬式に出た者が家に入るとき清めをした。遺族が忌中の間こもったのは清まる時間が必要との考えもあったから。>とウェブリオ辞書の葬式用語の項目にあった。*「さるべきことども」は<剃髪>ではなく<葬儀準備>なのだろう。大将は殿に再考を促したのであり、殿も頭では上の死を受け入れていたからこそ、辛い感情を抑えて大将の進言を受け入れ、同時に葬送準備を任せた、という意味に読んで置く。が、相も変わらずの主語や対象語の省略の数々で、文意がはっきりしない。

[第四段 夕霧、紫の上の死に顔を見る]

年ごろ(あの十五年前の台風の日にその姿を初めて直接垣間見て以来)、何やかやと(具体的な働き掛けとしては何も)、おほけなき心はなかりしかど(義母に当たる紫の上に恋情を募らせる事はなかったが)、「いかならむ世に(またいつか)、ありしばかりも見たてまつらむ(以前のような垣間見にでも上の御姿を拝見したいものだ)。ほのかにも御声をだに聞かぬこと(あれ以来は少しの御声さえ聞いていない)」など(などと大将は)、心にも離れず思ひわたりつるものを(紫の上を心から離れずに思い続けていたのに)、「年ごろ」は<此処数年来>みたいな言い方らしいが、以下に述べられる事の大枠での事情説明であることが殆んどだろうから、単に<この数年>で分かる文脈ならそれで良いが、過剰に読み手側の付度が期待されたこの物語の語り手の弁のままでは、設定された読み手とは違う読者である私は、可能な限り、文意を損ねないのは当然だが、文味も損ねない心算で、最大限の明示補語を当てて置かないと、文意自体を読み違えかねない。で、此処の「年ごろ」は、野分巻一章二段の「見通しあらはなる廂の御座にゐたまへる人、ものに紛るべくもあらず、気高くきよらに、さとにほふ心地して、春の曙の霞の間より、おもしろき樺桜の咲き乱れたるを見る心地す」と15歳の源君が初めて紫の上を垣間見た時以来、を意味する言い方だと規定しておく。しかし、それも十五年前の話で、時に紫の上28歳、今の源君が30歳だから、当時の印象のままなら妙に生々しい。それにしても、それ以来、また一度も、源君は義母に当たる筋の紫の上を直接には見ていない、という神経質なほどの繊細さ。しかし、こういう細かな仕来たりで守られる秩序というものは現代にでもいくらでもある。ただ、王家や封建家のような権勢家に以下一般民衆が従うという社会機構では、その家の家風が法律(多くは非明文)として武装警備されて社会的強制力を持つという実相を呈するので、今から見れば驚くべき事もまた多い。

「声はつひに聞かせたまはずなりぬるに*こそはあめれ(声は遂にお聞かせならず仕舞いだったようだが)、むなしき御骸にても(むなしい亡骸とは言え)、今一度見たてまつらむの心ざしかなふべき折は(もう一度拝顔申し上げたいとの願いが叶うべき折は)、ただ今よりほかにかいかにいかでかあらむ(只今を置いては他に在るまい)」と思ふに(と思うと)、つつみもあへず泣かれて(大将は

抑えようもなく泣けてきて)、女房の、ある限り騒ぎ惑ふを(女房たちが御簾前で右往左往しているのを)、 *「こそはあめれ」の係り結びは、「声は」という一項目の状態提示に対して、以下に別項目の異なる状態を提示する構文で使われていて、逆接で下に続く文型らしい。

「あなかま、しばし(少し静まれ)」

と(と何か気付いたか)、しづめ顔にて(動きを止めるように言って)、御几帳の帷を(御几帳の垂れ布を)、もののたまふ紛れに(そのお言葉で誤魔化しながら)、引き上げて見たまへば(引き上げて御覧になると)、ほのぼのと明けゆく光もおぼつかなければ(ほのぼのと明け行く光では薄暗いので)、大殿油を近くかかげて見たてまつりたまふに(手元灯りを近く掲げて上の御顔を拝し申しなさると)、飽かずうつくしげに(何処までも可愛らしく)、めでたうきよらに見ゆる御顔のあたらしさに(尊く美しいそのお顔立ちの惜しみ多さに)、この君のかくのぞきたまふを見る見るも(大将がこのように上を覗き見ていらっしゃるのを目の当たりにしながらも)、あながちに隠さむの御心も思されぬなめり(特に隠そうという御心も殿は御思いではないようでした)。

「かく何ごともまだ変らぬけしきながら(このようにまだ生前と何も変わらない姿ながら)、限りのさまはしるかりけるこそ(息絶えているのは間違いない)」

とて(と言って殿が)、御袖を顔におしあてたまへるほど(御袖を顔に押し当てなされると)、大将の君も、涙にくれて、目も見えたまはぬを(大将君も涙に暮れて何も見えなさらぬが)、しひてしぼり開けて見たてまつるに(強いて絞り開けて上の御顔を拝し申しなさると)、*なかなか飽かず悲しきことたぐひなきに(反って余計に悲しさが増す例え無さに)、まことに心惑ひもしぬべし(本当に心惑いしそうだが、)。*御髪のただうちやられたまへるほど(御髪がハサミも入れられずにそのまま躯体の横に揃えられているのが)、こちたくけうらにて(非常に綺麗で)、露ばかり乱れたるけしきもなう(露ほども見苦しくなく)、つやつやと*うつくしげなるさまぞ限りなき(つやつやとして寝姿を美しくしている形の素晴らしさに、大将は殿を制し申し上げたことの正しさに安堵しました)。 *「なかなか飽かず～心惑ひもしぬべし」は挿入句だ。「しぬべし」の下に「を」が省かれている。 *「御髪のただうちやられたまへるほど～」は注にく『集成』は「以下「一臥したまへる御ありさま」まで、夕霧の目に映る紫の上のさま」。『完訳』は「髪の手が枕辺にわだかまる様子を擬人的に表現。剃髪はしなかつたらしい。以下、夕霧の目と心に即して使者の美しさを叙述」と注す。臨終に際して出家の作法尼削ぎはしなかつたらしい。 >とある。三段で、殿に紫の上の剃髪の準備を託された大将は「後の御髪ばかりをやつさせたまひても、異なるかの世の御光ともならせたまはざらむものから、目の前の悲しびのみまざるやうにて、いかがはべるべからむ」と、不承知を応えていたように見えた。が、今いち判然としなかつたものの、この「ただうちやられたまへる」の記事を以て、剃髪が無かつた事の明示、と読んで置く。 *「うつくしげなるさま」は<美しそうな様子>ではない。剃髪しなかつた長いままの御髪が上の寝姿を<美しく見せている>のだろう。「げなる」は<そう見せている＝演出されている>という語用。「何気に」は現代語でも使う。また、「ぞ」の強調に<剃髪をしなくて良かったという安堵>が示されていると読んで、明示する。

灯のいと明かきに(灯火がとても明るいので)、御色はいと白く光るやうにて(上の顔色はとても白く光るようで)、とかくうち紛らはすことありしうつつの御もてなしよりも(何かと手入れして化粧していた生前の御姿よりも)、いふかひなきさまにて何心なくて臥したまへる御ありさま

の(為す術も無く無心で臥していらっしやる御姿が)、*飽かぬ所なしと言はむもさらなりや(至らぬ点が無い美しさと言えるほど格別な人なのです)。 *「飽かぬ所なしと言はむもさらなりや」は注にく語り手の評言。>とある。が、この舞台は、上の亡骸を前に力無く座している源氏殿と、その光景を几張を跳ね上げて見入っている大将が居て、その大将の視線を源氏殿も分かっている、という御簾内の場面だ。即ち、此処の文は、ほぼ源氏殿の視点であり、殿の内心文に近い、かと思う。「言はむ」の「む」は当然意で<言えるほどの>。「さらなりや」の「や」は感嘆詞。

なのめにだにあらず(人並みなどという程度ではなく)、たぐひなきを*見たてまつるに(類無いほど美しい上のお顔立ちを拝し申し上げるに)、「死に入る魂の(命が絶えて体から離れて行き掛けている靈魂が)、やがてこの御骸に*とまらなむ(そのまま亡骸に留まって形を残して欲しい)」と*思ほゆるも(と大将が思ってしまうのも)、*わりなきことなりや(無類の美しさの上を初めて此処まで間近に見た息子の大将にしてみれば、無理のないことだろう)。 *「見たてまつる」は大将が紫の上を。文の基調視点は源氏殿。 *「とまらなむ」は注にく『完訳』は「死せる紫の上の魂がそのままこの亡骸にとどまってほしい意。一説には、正気を失った夕霧の魂が紫の上の亡骸に、とするがとらない」と注す。終助詞「なむ」願望の意は、他に対する願望の用法である。>とある。従う。が、文意の論理性は破綻している。生き返るのが無理ならせめて笑顔の写真が欲しい、というのは今日では無理難題ではないが、当時では荒唐無稽だ。でも、そういう情熱が写真という技術を生んだのかも。いや、技術は偶然に起きてしまう事が多いので、育てた、と言うべきか。 *「思ほゆる」の主語は大将。「見たてまつる」ことから大将が受ける印象。 *「わりなきことなりや」は、この文の基調視点が源氏殿であることを明示すべく補語する。ただし内心文の体裁は残して、殿がそうお思いになった、などという客観表現までは加えない。で、どうやら「御袖を顔におしあてたまへる」殿は、実は意外に冷静に、驚きを隠せない大将の様子を見ていた、らしいというワケだ。いや勿論、気落ちや悲嘆はしていただろうが、四年前の時のように狼狽はしていない。いや、四年前も実は、騒ぎ立てる女房たちを制して蘇生術を試みた源氏殿は冷静だったのかも知れない。だから今回は、冷静というよりは観念して鎮静していたか。

[第五段 紫の上の葬儀]

仕うまつり馴れたる女房などの(上に親しく仕えてきた女房たちの中には)、ものおぼゆるもなければ(気の確かな者も居ないので)、院ぞ(殿御自身が)、何ごとも思しわかれず思さるる御心地を(具体的な事など何も思い付かないほどの御悲嘆を)、あながちに静めたまひて(強いて抑えなさって)、限りの*御ことどもしたまふ(上の化粧や着替えなど出来るだけの死装束を若女房に申し付けて整えさせなさいました)。 *「御ことども」は渋谷訳文にくご葬送のことをお指図>とあり、与謝野訳文にく遺骸の始末など>とある。断然、与謝野訳文を支持する。女房たちが仕えるのは、上の身の回りのお世話だ。上臈に指揮権があるが茫然自失なので、殿がじきじきに若人に指示を与えた、のだろう。葬送儀式全体の指揮執行は大将が承っている。式次第の物品や人員は手下の役人が滞りなく進めるだろうが、各所への連絡や僧の割り振りなどの人事は、当然に側近と相談の上でだろうが、大将の判断となるのだろう。

いにしへも(昔にも)、悲しと思すことも*あまた見たまひし御身なれど(悲しい別れを多く経験なさって来られた殿なれど)、いとかう*おり立ちてはまだ知りたまはざりけることを(ここまで直接に亡骸に寄り添ってお世話申すのはまだ経験が無かったが)、すべて来し方行く先(出会いから別れまでの全てが)、たぐひなき心地したまふ(類無い深い縁だったとお思いになります)。 *「あまた見たまひし」については、注にく源氏の身近な人との死別は、母桐壺更衣(桐壺)、祖母(桐壺)、夕顔(夕

顔)、葵の上(葵)、父帝(賢木)、六条御息所(滯標)、藤壺(薄雲)等がある。>とある。*「下り立つ」はく立ち入って振舞う>と古語辞典にある。此处では、直接細かく指示をすること、なのだろう。

やがて、その日、とかく*収めたてまつる(そのまま当日に上の亡骸は火葬にし申し奉ったのです)。*「をさむ」はく葬る>とあり、「葬る」はく墓所に埋葬する>とある。ただ、「その日」にく埋葬>までは普通は出来ないし、やらない。注にはく亡くなったその日のうちに葬儀をとり行う。八月十四日暁に亡くなって、その日の夜に茶毘にふし、十五日の暁に遺骨を拾って帰る、という手順。>とあり、下文にもそのような記事があるので、此处はく火葬をした>と読んで置く。

限りありけることなれば(火葬にする慣例だったので)、骸を見つつもえ過ぎしたまふまじかりけるぞ(亡骸を見ながら数日とお過ごしになれないのが)、心憂き世の中なりける(殿には辛い仕来たりでした)。「限りありけること」はく葬儀方法に定めがある、決まりがある、仕来たりがある、作法がある>ような言い方のようだが、下に「骸を見つつもえ過ぎしたまふまじかりける」とあるから、当時の貴族にあっては土葬はせずに火葬したらしい、と知れる。土葬なら、埋葬するまでは「骸を見つつ」過ごせるのだから。ただ、火葬をした理由が、腐食を嫌ったのか、穢れを嫌ったのか、仏教典に示されているのか、流行なのか、その他のかは、さっぱり分からない。慣例と逃げて置く。

はるばると広き野の(はるばると広い野の火葬場に)、所もなく立ち込みて(多くの参列者で隙間もないほど込み合っ)、限りなくいかめしき作法なれど(限りなく盛大な葬儀だったが)、いとほかなき煙にて(上はとてめか弱い煙で)、はかなく昇りたまひぬるも(捉え所も無く昇って行ってしまいなさるのも)、例のことなれど、あへなくいみじ(いつものことだが、あっ気なく実に無常です)。「はるばると広き野」は注にく『完訳』は「愛宕か」。『新大系』は「鳥辺野であろう」と注す。>とある。ざっと、清水の裏手の方らしい。

空を歩む心地して(空を歩いているような地に足が着かない気分で)、人にかかりてぞおはしましけるを(人に支えられて葬儀場にいらっしゃった殿を)、見たてまつる人も(押し申し上げる人たちも)、「さばかりいつかしき御身を(あれほど尊い六条院殿が、お劳しい)」と、ものの心知らぬ下衆さへ(と詳しい事情を知らない下級の従者さえ)、泣かぬなかりけり(泣かぬ者は居ませんでした)。御送りの女房は(亡骸の供をして来た女房たちは)、まして夢路に惑ふ心地して(上を近く見知っていたので、まして夢路に迷ったように現実の事とは思えないようで)、*車よりもまろび落ちぬべきをぞ(車から転げ落ちそうに力を失っているのが)、もてあつかひける(始末が悪いのでした)。*「車よりもまろび落ちぬべきをぞ」は注にく「桐壺」巻(第一章五段)にも同じような表現があった。>とある。桐壺巻では故御息所の葬儀で、光君から見て祖母の、その母北の方が、「車よりも落ちぬべうまろび給へば」とあった。確かに印象的な記事だった。

昔、*大将の君の御母君亡せたまへりし時の暁を思ひ出づるにも(昔の大将君の御母君が亡くなった時の暁が思い出されるが)、かれは、なほもののおぼえけるにや(あの時はそれでもまだ冷静だったのか)、月の顔の明らかにおぼえしを(月の顔がはっきりと見えていたが)、今宵はただくれ惑ひたまへり(今宵の源氏殿はただ暮れ惑っていらっしゃいました)。*「大将の君の御母君亡せたまへりし時の暁」は注にく夕霧の母葵の上の葬儀。「葵」巻に「八月二十余日の有明なれば、空のけしき」(第二章七段)云々とあった。>とある。ただ、此处では当時を「なほもののおぼえけるにや」と言っているが、当時の

光君は恐らく今以上に困惑していて、多分、今の方が冷静だ。今は混迷ではなく、落胆が深いのだろう。葵の上は産後の肥立ちが悪くてそのまま身罷った。幼子は左大臣家で育てられたが、母無し子の父親になった事は事実であり、その前には車争いもあって、光君は六条御息所との関係に手を焼いて、葵の上と御息所の確執への懸念も深く、御息所の生き霊は実際に葵の上の枕元に立った。先が読めない、ということでの困惑は今以上だったに違いない。しかし、何と言っても、殿は若かった。先は読めないが、自力の力強さは、何とかなる、と思わせるに十分な体力も財力も地位も恵まれた状態だった。その後に挫折もあったが、物の理解の深さや冷静さは今の方が格段に上だろう。先もほぼ読み切れる。それが悲しいのだ。もう、何ともならない。良くも悪くも分かりきった人生しか自分には残されていない。「くれ感ひたまへり」は終りが見えた、その実感だろう。

十四日に亡せたまひて(紫の上は八月十四日に亡くなって)、*これは十五日の暁なりけり(火葬は十五日の暁なのでした)。*「これは」は注に<事の後から説明する性格の叙述。「これ」は遺骨を拾って帰ることをさす。>とある。ただ、この「これは」は上文の「かれは」で示された葵の上の葬儀が八月二十日過ぎの有明であったことに対して、この紫の上の葬儀は八月の十五日の暁だ、と言っているように聞こえる。七月か八月かが分かり難いが、此処に明示されたものと読んで置く。

日はいとほなやかにさし上がりて(太陽がとても明るく晴れ上がって)、野辺の露も隠れたる隈なくて(野辺の露も隠れる下葉の影もなくて、何も無かったかのように過ぎて行く)、世の中思し続けるに(世の中の流れを見続けると)、いとど厭はしくいみじければ(殿はいっそう自分が意味の無い存在のように思えて嫌気が差し悲しく)、「後るとても、幾世かは経べき(死に後れるとしても、いつまでも世俗に塗れて居たくない)。かかる悲しさの紛れに(こんな情けなさを紛らすには)、昔よりの御本意も遂げてまほしく(昔からの出家願望を遂げてしまいたい)」思ほせど(と御思いになるが)、*心弱き後のそしりを思せば(気弱な後見者としての悪評が東宮の即位に障るのを懸念なさって)、「このほどを過ぐさむ(今の時期は避けよう)」としたまふに(とお考えになるので)、胸の*せきあぐるぞ堪へがたかりける(胸の支えが晴れずに込み上げる悲しみに堪え忍ぶのが辛かったのです)。*「心弱し」は<気弱だ>。「心弱き後のそしり」は<後でされる気弱だという非難>だろうか。何を言っているのか分からない。後であろうと今であろうと、誰に<気弱だ>と言われて、それを気にする必要が世の無情を見据えた今の源氏殿自身にあるのか。「そしり」は単に非難なのだろうか。殿は今、東宮の祖父なワケだが、「後」には帝の祖父となることが約束されているワケで、その影響力を以ていっそうの栄華を誇る、権勢を張る、ということも期待できるワケだ。また、実権在位者本人ではなく、その権威表象者の好意の恩恵に浴するという立場は責任を負うこと無く富を得られるという便利なもので、その庇護者当人は出家者であっても差し障りはない。ただし、その出家が伴侶を失った心細さからというのでは、あまりに私的で公的な説得力に欠ける。そうした者に多額の援助を与えるのは帝として憚られるかも知れない。もし、その出家が世を案じ、広く災いを憂いてのものなら、その出家者に多額の援助をするのは正統な祭り事と見做されるかも知れない。この体裁を繕う光景は、丸で今の無責任な役人と政治家のお手盛りの風潮政治そのものだが、何も是が日本独自なものでもなく、外圧に一溜まりも無さそうな庭園文化はおよその社会組織体制にあるとしても、是で体制が長期間持つのはやはり島国の地政的特性か。割れるほど大き過ぎず、発展余力を保つ階層構造を築けないほど小さ過ぎない、という規模。という理解で良いのだろうか。そこに真の生きる意味はあるのか。などと言ってみても、狂気は日本にだけ蔓延しているものでもなし。どんな情熱もその時々状況判断反応に過ぎないという一面は必ず有るので、何れ束の間の事なれば、ともかくは生き延びて置くことで良しとすべきか。何れ、それも束の間だが。などとまた、くどくどしく話題がそれたが、ともあれ、此処の「そしり」はそういう政略上の意味での<悪評>だろうか。であれば、この「心弱き後のそしり」は逆算すれば<東宮の即位への悪影響>とも言えそうだ。相当に故事付けがましいが、今のところは

が納得し易い。 *「せきあぐ」は「堰き上ぐ」でく堰き止めて溜める、むせかえる、胸いっぱいになる>などと古語辞典にある。結局、仏心はこういう気持の救済法なのかと妙に納得する。そういう私的な心理上での解釈は一面的に過ぎるような気もするが、結論が得られたかの思考停止に安住する危険性は、宗教が持つその社会心理的な影響力の大きさを、良くも悪しくも能く説明できるように見える。今でも教条に、文字通り命懸けの情熱を傾注する者が後を絶たない。陶醉は性的な生産性に有効で、それは別次元の問題解決を可能にし、以て種の保存に資するのだろうが、本末転倒を引き起こしかねない微妙な作用だ。真空インフレーションが物理なのか心理なのか、私には分からない世界だが、緊張無くして充実は無いし、緊張ばかりでは擦り切れる。ただ、物理も心理も人間の日常生活に於いては、その有機体性を離れては一瞬たりとも存在し得ない事は確からしい。学究は多様性を求めて何処まで飛んでも好いが、政治での現場を離れた論議は無意味で危険だ。